

◇平成30年度 南丹市学校自己評価書◇

【 南丹市立美山小学校 】

評価領域	南丹市教育委員会「学校教育指導の指針」に基づいた実践の方向性(自校用に表現改正)	自校における課題に対する取組の 具体的達成目標(可能な限り数値目標を含む)	成果	達成度	課題	課題に対する次年度に向けた改善・克服・発展策
特徴 色 あ る 学 校	熟識をベースに、地域の特性や地域の方々の協力関係を活かした地域とともにある学校づくりの推進	コミュニティ・スクール初年度にあたり、「少子化・人口減少に対応した活力ある学校推進事業」の一環として、熟識に地域・他校種との協働で取り組み、美山中学校ブロックとして連携して進める教育への理解を深め、「美山の子ども」として地域協働の子育てを進める意識をもっていただく足がかりを作る。 ○熟識への参加を促し、家庭数の3分の1の参加 ○保護者アンケート及び、学校運営協議会委員の評価において、80%以上の肯定的評価	○地域連携コーディネーターを活用して、「美山学」を中心に、地域と連携した学習活動の充実を図れた。 ○子どもたちのふるさどに対する興味関心の高まりが見られ、そのことを保護者・学校運営協議会委員の90パーセント以上が実感できた。	A	○コミュニティ・スクールの概念がまだまだ地域に浸透しておらず、地域とともにある学校としての営みを地道に展開して、理解を深める必要がある。 ○従来から学校からの依頼に対する積極的支援の姿勢が定着しており、地域発信・協働の取組に発展していない状況がある。 ○熟識の参加者の幅を広げていく必要がある。	○学校だよりや美山学便りを通して、地域協働やコミュニティ・スクールの理解を深めていく。 ○学校運営協議会委員を通して、地域との連携を深めていく。
す い 教 育 の 一 人 の 能 力 を 引 き 出 し、 個 性 を 伸 ば	学習指導	児童の学習課題の分析のもと、つけたい力が定着する教育課程編成とICT活用を含め、興味・関心を持って前向きに学ぼうとする授業づくり、全教職員が取り組み、深い学びを実現させる。 ○児童アンケートで、目標やめあてを持ってがんばっていると答える児童80%以上	○ICT機器を効果的に活用して授業を展開し、どの子どもにもわかりやすい授業展開ができた。 ○聴くことを大切に指導を展開し、児童がめあてをもって学習に取り組む力と発表する力を高めることができた。	B	○積極的に挙手して発表する力が高まったが、場面によっては声量が不足することがある。 ○「伝え合う」から「練り合う」「深化させる」という段階に至る指導を充実させる。	○課題に的を絞った授業研究会を実施し、より効果的な働きかけや指導について研修する。 ○児童の授業や行事のふりがえり、課題に視点をあてたふりがえりをする。
	特別支援教育	特別な支援を必要とする全ての児童の「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」「移行支援シート」を作成し、活用できるようにする。 授業のユニバーサルデザイン化を推進し、実践モデル事例の蓄積を図る。	○特別支援教育コーディネーターが中心となって校種間の連携を図り、支援を必要とする子どもに対して関係資料の作成と適切な支援を実施し、校種間の共通理解のもと支援の継続性を維持していく。 ○個別の指導計画・教育支援計画を作成する児童に対して、確実に移行支援シートを作成	B	○児童・生徒を直接指導する担当者間の連携機会が持ちにくい状況がある。 ○保育所の体制上、保育担当者が保育所を離れて連携することが難しい。	○両教務主任の連携により、時間割場の配慮をして、担任同士等の直接の連携機会を設定する。 ○小学校の加配が訪問したり、文書による連携をしたりして、必要な情報を得る。
	地域に根ざし	互いの実践や他校の実践、諸研修での学びを共有し、全教職員で授業のUD化を進め、全ての児童が学びやすい授業作りに努める。 ○児童アンケートで、授業はわかりやすく楽しいと答える児童80%以上	○関係機関との連携により、専門家による授業参観をしてもいい、専門の見地からアドバイスを受けることができた。 ○UDを意識した授業を展開し、実践を交流した。	B	○個別の支援を要する様々なケースに対して、支援体制を組みきれない実情がある。	○専門家による指導により、個別の見取りやより有効な支援の在り方について研修を実施する。
	地域に根ざし	熟識や文部科学省指定事業の協働による実践を通して、次代を担う子ども像やその育成の方法について共有し、連携協働した教育活動や子育ての取組を展開する。 ○「子どもたちに地域の良さを学ばせている」「子どもたちは、美山の自然や文化・歴史に親しみを感じ興味を持っている」という項目で、保護者アンケートや協議会委員の80%以上の肯定的評価	○関係機関との連携により、専門家による授業参観をしてもいい、専門の見地からアドバイスを受けることができた。 ○UDを意識した授業を展開し、実践を交流した。	A	○熟識に参加された方の肯定的な感覚が十分に伝わっておらず、参加者の広がりが不十分である。 ○熟識のテーマについて、参加者の状況等も踏まえ、発展的なものにするか深めるかを検討する必要がある。	○熟識の開催時間や会場、広報の工夫により、より多くの方々に熟識に参加していただく。 ○すでに熟識に参加された方の感想などを伝える。
進 な 人 権 尊 重 を 踏 ま え た 豊 か な 教 育 の 推 進	人権教育	日々の生活を通して、いじめをはじめとした人権侵害を許さない仲間づくりを推進する。	○人権旬間の取組を含め、友だちを大切にするといい気持ちで大切にする指導を展開でき、児童の意識も高まっている。	B	○人権旬間で高まった意識が徐々に薄れるという傾向があり、日常の実践力につながる日常活動を展開していく。	○人権教育の日常指導を交流し、効果的な指導を参考に学年の実態に応じて指導を展開する。 ○掲示や呼びかけなど日常指導を児童主体の取組として展開させる。
	道徳教育	新たな教科書をベースにしつつ、「京の子ども明日へのとびら」や地域教材等との関連を図りながら、全体計画や年間指導計画、展開の概要、別様を作成し、計画的に指導する。	○年間計画を見直し、スムーズに授業を展開することができた。 ○「美山学」で、自作資料等を活用したり、ゲストティーチャーを招聘したりした授業を実施できた。	B	○自作資料や地域資料については、データ化して蓄積していく。 ○本年度の実践を踏まえ、年間指導計画の見直しを図る。	○適切な評価の在り方について、検証し合うとともに、他の実践に学ぶ。
	生徒指導	学校生活全体を通して、一人一人の発達段階に応じて、自己存在感・有用感を高め、共感的人間関係を育み、自己決定を大切に指導を丹念に進める。	○聴くことが相手理解の第一歩として、相手の良さを知り伝えることを通して、自己肯定感の高まりが見られた。	B	○あいさつ、しっかりと聴く、時間を守るなど、相手を意識した行動をする力をさらに高めていきたい。	○教師の日常指導と合わせて、児童の取組として展開する。
活 度 健 を 実 践 で 成 熟 な 教 育 の 推 進	スポーツ	児童の体力の現状を分析し、体育の授業における運動量の確保や課題に応じたトレーニングプログラムを実践し、体力及び運動能力の向上を図る。また、運動や筋力等が生徒にわたって健康に関わることを指導していく。 ○次年度の体力テストにおいて、本年度の全国平均との差を縮小する。 ○児童アンケートで、健康のために体力作りががんばりたいと答える児童70%以上	○体力の状況について全教員が共通認識を図り、体育科の授業や体育的行事における運動内容の工夫・改善が図れた。 ○外遊びの推奨により、運動機会の拡充を図れた。 ○スポーツ少年団活動や各種の競技会に積極的に参加する児童があり、意識の高まりの広がりが見られた。	C	○運動習慣や運動嗜好に二極化が見られ、休憩時間にはほとんど運動しない児童が見られ、体格や体力に影響が見られる。 ○休日の習い事や遊びの変化により、休日や長期休業中の運動が不足している傾向が見られる。 ○スポーツ少年団活動や各種の競技会に積極的に参加する児童があり、意識の高まりの広がりが見られた。	○体育科授業における運動量確保の授業研究や実践を体育部中心に研修する。 ○スポーツ少年団や社会体育参加状況を把握し、休日や家庭での運動を考慮した体力向上プログラムを作成する。
	研 修 の 充 実	視点や明確にした授業研究会を計画的に実施し、課題を明らかにして授業改善に反映させる。 ○全ての教員が、授業改善につながったと実感できる授業研究会の実施	○改善の視点を明確にして全ての担任が授業公開をして、研修を深めあうことができた。 ○UDや支援を大切に指導ができた。	B	○研究発表会に向けた授業研究が中心となったため、教科に偏りが見られた。 ○指導員や支援員を含めた支援体制を有効にコーディネートする。	○各研究部で学んだことを全体のものとする機会を設定する。 ○集団の中の個別の指導の在り方を学び合う。
方 お 学 改 革 の 推 進 の 働 き に	業 務 改 善	働き方の意識改革を推進し、省力化・効率化のアイデアを共有し、単に勤務時間の削減だけでなく、時間対効果を意識し、効率の向上を職場として求めていく。 ○70%以上の教職員が実勤務時間を削減し、効率の向上を実感	○働き方改革に対する意識が高まり、前年度と比較した実勤務時間の削減を図ることができた。 ○早期退勤日の設定や仕事効率化のアイデア共有など、職場としての取組が展開できた。	C	○個別に見れば状況が改善されていないケースが見られるため、個別の分析による改善が必要である。	○ICT活用等をさらに促進し、仕事効率化を図る。 ○働き方改革が、子どもたちの学びや育ちに反映されるという事例を研修する。